

王安憶論 : 「新時期」を生きる「小説家」の精神史として

著者	松村 志乃
学位授与年月日	2013-11-28
URL	http://doi.org/10.15083/00006477

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 松村志乃

本論文は、現代中国で活躍中の女性作家、王安憶の精神的歩みを分析したものである。王が文壇に登場した1970年代末から、20世紀末までを対象に、その長編小説をテキスト分析する手法によって、彼女が作家としての自己意識や小説を書くことの意味を問い続け、自らのアイデンティティを模索した軌跡を論じる。本稿は三部より構成されるので、以下各部に従って概要をまとめる。

第一部は「八十年代の王安憶——「新時期文学」の躍進と挫折のなかで」と題される。1980年代中国の改革開放政策の雰囲気の中、都市社会主義文学とは異なる、民族文化の根底を尋ねた「ルーツ探し文学」が注目された。王の「小鮑荘」はその代表作のひとつとして評判を集めたが、農村や辺境に発見された当時の「ルーツ」と王のアイデンティティ探索には大きな齟齬があった。「小鮑荘」は農村を描いたテキストだが、王にとって農村はまったくの他者で、理解不能であり、「ルーツ探し」のブームが去った後も、彼女は作家として自らの帰属意識を探る努力を続けることとなった。こんななか、1989年に6・4事件が起き、王は作家としての自意識に強い疑いを抱き、しばらく執筆ができなくなる。1990年に発表された「おじさんの物語」は、社会主義時代に社会改革に貢献すべく位置づけられた旧世代知識人作家の「欺瞞」と彼らへの反発を描く一方、それを描く自らの作家としての自意識の不安定さ、「書くこと」への不信感も描かざるをえなかったと本稿は論じる。

第二部は「九十年代前期の王安憶——文学者アイデンティティの模索」と題される。こうした文学者としてのアイデンティティの危機は、多くの作家・知識人に共通する問題となつて、「人文精神論争」などの議論を巻き起こしていた。王は大学での講義録「小説学講義」のなかで、「おじさん」に見られる旧世代の知識人と区別する形で、文学的な技術者の意味で自らを「小説制作者」と呼び、理想的小説を「心霊世界」という概念で表した。本論文では具体的に、『ノートルダム・ド・パリ』『百年の孤独』に関する講義を検討し、実態としてそれらが王の提唱する作家意識や作品世界を明確に指示するものではなく、大衆を導く「おじさん」のような知識人と技術的制作者との間で、揺らめく王の精神的状態を示したと論じている。これは講義と同じ年に書かれた長編『紀実と虚構』にも典型的に表れている。ここでは、自らの先祖の「ルーツ」を探索して、「家族神話」としての小説に構成する「叙述者」（語り手）が前面に登場する章と、語り手「私」自身の成長物語が語られる章が、互い違いに描かれる。前者では、小説を作成する「私」が、自分の都合のよいように事実を切り取り、ねじ曲げる。後者では、叙述者は表れず、王自身の自伝的要素も強く反映されているため、一見すると前者とは異なり、「紀実」（事実の記述）として描かれていると判断されやすい。しかし本稿は、両者ともに「文学の権力」が潜んでおり、後者ではとくにそれが隠蔽されたとしている。そこに王が文学創作に関して、旧来の「現実」を忠実に反映しつつ、社会改革に尽力する文学者のイメージに対する共感を捨てきれず、しかしそこから脱出しようとも

がいている姿を感得するのだ。この葛藤は、自らのアイデンティティの確認を迫る風潮のなかで、王の創作に新たに展開を与えていった。

第三部は「九十年代後期の王安憶——「上海」をめぐる」と題される。九十年代後半に入ると、グローバリズムがもたらした急激な近代化の波が押し寄せるなか、旧来の街にノスタルジーを感じ取る風潮が高まり、上海では「老上海（オールド上海）」ブームが盛んになっていた。これらに対して違和感を覚えた王は、作家としての立ち位置を、ブームとは異なる「上海」を探索し、上海こそを自らのアイデンティティとすることに据えることで、作者の新たな一歩を踏み出していく。本稿では1930年代から上海に生きた女性を描く『長恨歌』、「西洋」への憧憬に駆り立てられた果て「罪」を犯した女性芸術家を描いた『ビルを愛して』、都市中心部の上海ではなく、郊外に住む移民や貧困層に生き活きとした形象を与えた『富萍』の三つの長編を扱うことで、1990年代後半の王の創作の軌跡を描いている。『長恨歌』は、50年代から70年代にかけての上海にこそ「生活の美学」を見出し、それを喪失することで主人公の悲惨な結末を導いて、浅薄な「老上海」ブームに対抗する言説を提出する。一方で『ビルを愛して』では、「西洋」崇拜に陥った芸術家を描くことで、「進歩」に共鳴しつつも、グローバルで圧倒的な進歩思潮に対する疑義を呈したと言える。その立ち位置は、『富萍』のなかで、貧しくも自力で生活を営む周辺の民衆を描くことによって表明されたと論ずる。ある意味では、かつて社会改革に邁進するとされた作家のイメージは、形を大きく変えながらも、王にとっての新たな「上海」という時代と場所のなかに置き換えられたと言えるだろう、ということである。

本稿の論述に対して、本審査委員会は、王安憶という現在進行形で、大量の長編小説を書いてきた作家について、鋭敏で説得力のあるテキスト分析を行い、彼女の作家としての精神史を1980年代以降の現代中国思潮のなかに位置づけつつ、丹念に辿ったとして、高く評価できる点で一致した。そのテキストの分析能力は、今後の研鑽によって、言説の分析に大きく貢献できるであろう。むろん論文として、すべて完璧というわけではない。審査委員のなかからは、いくつかの問題点も指摘された。第一に、アイデンティティが、その時期によって、作家・知識人を焦点としたり、中国人となったり、作家個人となったりする揺れがあり、論旨の一貫性にやや瑕疵が見られる点。第二に、上と関連するが、作家としてのアイデンティティの葛藤から「上海」という帰属性への転換にやや飛躍があること。第三に、テキスト分析から推察されるように、80年代から90年代には、世界文学の中国文壇への流入があり、モダニズムやマジック・リアリズムの影響が王にも見られる。これらを記述することで、さらに奥行きがもたらされたであろうこと、などである。しかしながら、本稿は、中国文学における、強い「伝統的課題」あるいは「伝統的な壁」——要するに、作家は社会改革に尽力するリーダーたるべきで、その作品は、客観的事実を忠実に描くことを理想とする——そうした枠組みを見事に浮き立たせており、その枠組みに矛盾を抱えながら、挑み葛藤した作家の精神史を巧みに描き出した、と評価しうるだろう。本審査委員会は、本稿にいくつかの問題点があることは否定できないが、十分に博士号に値する価値があると認め、博士（学術）の授与を提案するものである。（代田記）